

## 『岩漿』創刊から二十一年間の流れ

平成九年、伊東市池の「石ばし庵」に集った詩人小山修一氏、小説・随筆の森周映雄氏、詩人・随筆の秋藤俊氏、小説の木内の四人。それに当日参加はできなかったが小説・随筆の深水一翠氏。この五人の発起人が産んだ同人誌が『岩漿』（マグマの意）だった。当日、書家でもある秋藤氏が墨痕鮮やかにロゴを描いた。小説に限定せずに文芸一般を扱い、自由な作風を尊重する。全員が同人雑誌、会誌などの編集に携わった経歴の持ち主だけに、合評会の弊害も知っていたのだ。

創刊は出来ても継続しがないのが常。第二号で早々に「三号雑誌」の警句の意味を思い知らされた。少ない原稿に慌てた私は、頁割負担金にして十二万円余の額になる応募予定作『夢の海』を岩漿用作品に換え、一方で商業誌『公募ガイド』の無料広告を利用して仲間を募った。このときに小説の岩越孝治氏、童話の田村春氏等大勢が入会する。また、静岡県東部の公立図書館へ二冊ずつに加え、国立国会図書館に規定数三冊

を納め、定期刊行雑誌として番号を得る。文学界同人雑誌係にも送付を開始。会員も五名から二十九名に膨れ上がった。特筆すべきは伊東の郷土史研究家森山俊英先生の支援と参加だ。サガミヤ書店との縁も先生から。後の歴史家の諸氏や市議とのご縁も先生に源を発する。会員は漸増し三号で四十一名、四号で五十一名に達する。年に動かせる資金は七十万円余、年間二回の発行を賄うことができた。また、三号から詩人の阿部英雄先生が寄稿してくださり、地元同人誌を主宰していた平田雅子氏も加入した。もう一つ、小田原の画家近藤満丸氏が表紙や口絵・カットを、この三号から担っている。未熟な同人誌は大勢の師に囲まれて図体先行で成長していった。四号からは、以後『岩漿』の知的な顔となる歴史研究家桜井祥行氏が参加、読者をして正座せしめる作品を掲載し続けることになる。有識者森山直介氏をして涙せしめた詩「たちあちゃんへ」を創った日吉睦子氏は四号から。写真家ジョニー・ハイマスの心を識る畏友浦船健之助氏が写真「越後」を載せるのが五号。この号から馬場駿の連載小説『孤往記』が始まる。そして六号。森周映雄氏がこの号の編

集長を務め、岩漿に新鮮な一石を投じた。会員数は七号、八号と五十名を確保するが、九号から減少傾向を示し、以後その流れは止まらなかつた。平成十四年十月、危機感を露にした岩漿編集部は、冷えたマグマを加熱すべく『十号特大号』を企画する。それは岩漿作家のプライドに訴える一種の賭けだった。結果は百九十五頁、小説数六、執筆参加者十六名という岩漿史上最大の規模となつた。偶然であろうが、この頁数は今次発行の十九号と同じである。この号、岩越氏が『招魂祭』で『吾妻鏡』を下敷きにした時代小説を発表して非凡な語り部ぶりを披露、以後巻末を飾る小説の常連となつた。次いで十三号では、桂川ほたる（平田氏の筆名）が『愛娘』で長編デビュー、今号の『銀塔虫』に繋がる独特の小説世界を展開している。にもかかわらず、同人誌岩漿のマグマの冷えはしだいに顕著になつていく。十六号を『第二期創刊号』と銘打って、執筆者の心のリセットを誘引しようとした所以だ。頁数も百三十九と検討したが、この号が阿部先生の追悼号になつたのは、或る種の予兆か。発行人小山氏と編集者の私が追悼文を載せている。年二回の発行は、資金

難と、現役世代が殆どという当文学会の特色からくる作品不足に因り、いつしか年一回がやつとになつた。書き手は号を重ねることに少なくなり、数人の書き手が複数の筆名を使って表面的な賑やかさを保つ傾向に拍車がかかつた。もつともそんな中でも朗報はあつた。会設役柳田圭一氏の登場である。『マサレのない国』の著者でもある氏により、「マグマの集い」という会員の集いが始まり、『会報マグマ』も十回以上発行された。編集部は九号あたりから、印刷屋に編集や校正、版下作りを依頼する費用を節約するため、「版下」に近いものまで用意し、印刷と製本だけをプロに頼むという雑誌作りに移行していた。これにより一発行三十数万という費用を半減させた。動かせる年間資金が十五六万にまで落ち込んでいたのだ。発行後の配布用切手も、小山美智子氏、浦船氏、日吉氏、木内正夫氏などの寄付に頼っていた。同人誌は、目的、会員、資金、作品のどれを失つても存続が困難になる。十六、十七、十八号と、この意味では「青息吐息」の発行が続いた。むろん私自身の多忙や体調不良、諸々の意味での経年劣化もあるが、自作を本に載せることに対する感動が、

会員の中で小さくなってきたことが主因ではないのか。ただ、代表という「牽引者」の責任は免れない。今回の辞意表明は、私の中では必然に近いものだった。

私事、になるのかもしれないが、同人誌『岩漿』と長きに亘るその活動の中で、いろいろな意味でお世話になった方々に、末尾ながら御礼を申し上げたい。

商業的には殆ど相手にされない岩漿を、唯一店頭に置き続けてくれたサガミヤ書店の沼田社長。伊豆全域に亘る有識者に岩漿への参加や支援を呼びかけ続けてくれた森山先生。学者としても多忙な中、毎号寄稿を続けた桜井氏。作品の質や活動のあり方につき、指導・助言を惜しまなかった元『小田原文藝』の露木博子氏、『土砂降り』の小倉弘子氏、『東京四季』の山田雅彦氏、『胡壺』の樋脇由利子氏、元当会会計役の柳田氏、時事・文芸評論をブログで展開する後藤和弘氏、評論家加藤清志氏、画家の近藤氏、書家の秋藤氏、元やまと書店経営の鈴木律子氏……。本当にありがたいが、どうぞごさいました。お名前を挙げきれるものではないがこれは、代表・編集長辞任についてのお詫びでもある。

ようやく同人誌として全国的に認知された『岩漿』。優れた後継代表を得て、この後も二十、三十と号を重ねることを願わずにはいられない。

この回顧をメインにしたあとがき『散つてなお花筏』を最後に木内は代表を降り、結果的に会から「代表職」は消え後任態勢が固まるまでということ、二十号からは編集部を木内と深水、岩越、桂川の三氏で構成することになった。さらに深水、桂川両氏が事務局を兼任する。この編成で会は二十号から二十四号までを発行した。この後木内は高齢と体調不良に因り会を退き、発起人でもある若い小山氏が後任の編集長となり、前記三氏がそのまま会と『岩漿』を支えて最新の二十七号に至っている。新・岩漿文学会の躍進は目覚ましかった。会員は増え、頁数も増し『二十七号』などは二百六十を記録している。桂川氏の創る会報『CORE』の充実も見逃せない。寄贈先図書館は増え、販売書店も増加している。もつとも運営の厳しさは変わらない。印刷費や送料の値上がりなどはその最たるものである。舵取りの労を労わずにはいられない。